

研究資料

廻国道の記二

鈴木廣之

寒返る山風、降積りたる大雪ひとかたならぬをしのぎ、その日やうく榛原といふ所につきて小家に入、椎柴茅の葉などおりくべ、焼火にあたりにけふの寒さを暖まり、粟の飯などたかせ瓠なる酒とり出てのめり。これぞ一簞の食一瓢の飲にしてるまうにひすといふなるらん、とても寝られねば夜更るまでたき火にあたり、明るおそしと夜ふかく出行、それより敦賀の津といふ所へ行ぬ。向ふ遙かに見わたしければ、氣比の海まんくとして氣比の宮けに立てり。こゝを九景とは八景に一景まされり。海士の塩やくけぶり立のぼり、すゑは霧霞消にほふよそひげにおもしろかりけりとて九景の浦と名付けるとかや。爰に別て知る人の有ければ問よりぬ。あるじ我を浅からずもてなし、けふもくくとむる程に一日とうりうし、一日は氣比の宮への参詣、次のならひ末神々々一日は小舟にのり磯辺の貝などひろひ、しかもその日は長閑にて磯づたへに櫛川といふ松原にあがり、それより、

ゑ

西福寺といふ寺に詣でて、そこなるうしろの山へあがり谷をくだりてければ、世を捨人のかすかなる庵室に入て閑伽桶なる清水ちいさき足鼎にて湯わかし、仏に手向けの茶湯のたてのこしなどあはれにのみて、帰りしみれば仏前と見えて少高き所あり。反故にてはりたる障子半あけ、その奥のかたを見れば、絵にかける阿弥陀の切櫛のけぶりて焦がれたまふ、しかとも見え分ず。まへには土器の香炉、花瓶に花たてて神におもひ入たるていなり。竹の棹には墨染衣、かみの襖うちかけて、げに世におもひ残す事もなきやうなる風情、見るかいありて殊勝なりし。世にあらばかくこそあらまほしけれと其時はおもひ入りぬ。

ゑ

明れば敦賀の津をも立出、荒路山を越え、やたのを過、海津の浦へつく。湖水まんくとして竹生島も程ちかく、其日はあらしはげしかりし程に、舟にもものらず磯づたひにしほつ、しらひけ々々通り小松原過行ば比良の根風いと寒く、浦辺によるさざ波や、志賀唐崎の一ツ松、つれなく春の日も暮て大津浦に夜をあかす。明ればいそぎ大津を出、逢坂山をたどり越し花のみやこにつきにけり。

古郷といひみやこといひ一かたならずうれしかりし。いにしへにはなを人家立ち増さりて鴨川白川もみな平地になるまで軒ならび、繁昌のよそひ誠に帝土ぞ尊かりける。みやこは二条油の小路にてゆかりの家にぬれば、年久敷して相見しとて、あるじさまくにもてなして、こよなき心の色を見る程に、十日あまり逗留し侍りける。むかし見しかた恋しく忍びかねて、方々歩き。まづ祇園、丸山、双林寺、龍山、清水ここかしこに詣でて日をばくらしつ。

ゑ

其後又四条河原に行ひてみれば、さまくのあやつり、色々けたもの、世の常に替はりて生れ付たるもの共あり。美しい若衆おどり紛るる見物おゝかりし。僅かなる御足ももうくるとて、捻を骨折り汗水になりてどろめくをみれば、世の中をわたる程かなしき物はあらじとあわれもふかくおもはれ、それより建仁寺の前を過る。程ちかき杜のうちに人のよぶあり。鶴の林といひてむかし今にいたり人とぶらふ所なりけり々々地蔵堂観音も同座ありて、御前には空也上人の木像あり。南には鳥辺野にけぶりいと心ぼそく立のぼり、余所のあはれに袖絞る、思ひやられてかなしかりけり。大仏殿、三十三間ふし拝み、豊国明神へ参りたれば、そのいにしへの名のみ宮殿廻廊やぶれ損じかた斗なるありさま、何事も盛衰の夢なりけり。むかしの名残とては石ずゑ、所々の松桜のみ木だちぞ朽残りける。かたへに春をわすれず花少しづつぽみ出て、いまだ盛なるはなかりけり。いにしへいみじかりし寺共の跡、神職宮使の家々の跡、広々たる野辺となりて、すみれ、かるかやしげきなかに雉子の啼立かたもありけり。久しからぬ命のうちにさかへおとろへを見るこそあはれなりけれ。

其後北野の天神にまうでて南の門よりいらんとおもひ、経堂老松のかげを過て、松原木深き鳥ののくにおく青苔滑なる道二町斗有。いにし秀吉大閣御所の御時、日の

本の数寄者をあつめ、御存知あるは不_レ及_レ申、知_ルしめされぬ者たちも数寄を心がけ_ケ々々々たとひ伊勢_{いせ}天目、伊勢_{いせ}焼_{やき}の茶入_{かま}々々々釜_{かま}にてなりとも、ふだん□き湯たへさず、数寄たる者に_レ思_いの茶や_レ々々かこひ、よしあし_レ々々竹のはしら竹すだれかけ、萱_{すが}筵_{じり}、縁座敷_{えんざしき}でなりとも茶をたて申せとの御事にて、京_{きやう}界_{かい}の者は不_レ及_レ申、近国遠里の数寄者ども参りつどひて、此松原の木かげをかた取て、おもひ_レに_レしつらひ、茶の湯をしたる事、われ童部_{わらべ}の時なれば夢のやうにあれど、少しおぼへ侍るを思ひ出てあはれなりし。大閤御所出御有て、いづれをものこさず其心_{こころ}々の茶会_{さかい}を御覽_{ごらん}せられ、其名をもたづねさせたまふ。御心のとどまるかたには御腰_{こし}をかけさせられ、いづれをも平等_{びやうどう}に奇特_{きとく}なりとおふせ侍りて、御心ざしをくばらせらるる程に、有難_{ありがた}くかたじけなく拝_かさぬ者ぞなき書付侍り。大内見物。南門を入、神楽所、経蔵_{りんぞう}の輪蔵_{りんぞう}、たからぐら、毎月廿五日法楽の連歌所、其日ならねど連歌師共あつまり、連歌半なるを座敷の縁_{えん}にこしかけ少々程きき侍りし。其より廻廊_{くわうらう}に入ぬれば、ふりたる木立の梅幾本あり。しらく一重なるは苔地にちり敷、くれなゐに八重なるはさかりなり。千里の外もおもひやらるる斗_{にほひ}匂_{におひ}みちて、異木もかほる斗_{にほひ}なり。御神前の拜し奉れば、宮使常灯_{みやしじやうとう}がかげそへて光明かくやくたる奥に錦の戸張、御簾_{みす}かけ、名香しめやかに薫_{くん}じ渡りてしづかなるよそひなれば、いとど尊_{たうと}く、御内陣_{ごうちん}に休らひけるが、おそれあれば立出ぬ。

みやこの名残おしさのまま十日斗り逗留し、ここかしこ見廻りて、三月五日に都を出る。あるじ事の外名残おしみて遙_{とほ}の道を送り出る。われも又わかれん事のかなしさに鴨川の辺までうちつれて来れり。三条大橋の上にしばしたらずみて四方_{よも}の気色をながむるに、さすが都の事なれば日の色、雲のよそひ、霞_{かすみ}も一しほほのめきにほふ。北より東を見送れば、加茂山、御手洗、吉田の宮、若王寺、黒谷、永観堂、南禅寺、栗田口、四宮、千谷寺、知音院、祇園、八坂、長楽寺、丸山、双林寺、龍山、清水、今熊野、清閑寺、大仏、三十三間堂、東福寺、泉涌寺、稲荷、藤の森、深草山、伏見野迄も見へ渡り、北より西を見渡せば、北野、金閣寺、衣笠山、愛宕山、紫野、蓬台野、今宮、紫竹、船岡山、霞の内野、見共野、松尾、平野、向明神、嵯峨_{さか}、太秦_{うずまさ}、仁和寺、大井川、桂川、南には、淀_{よど}、戸羽、竹田、木幡山、男山も見へ渡る。めかれせず見をれば、はや日高時移る。折しも弥生上旬の事なれば、

所がら花のみやこ人のいとまありげに綾羅錦_{れうらきんしやう}繡_{しゆう}の袖をつらね、老若男女貴賤をえらばずうちむれて東山にあそび行。うら山しさやるかたもなげに、送り来し人に、はや帰_{かへ}りたまへ、われら又道いそがんといひければ、さらばとて細_{さい}々なる酒_{さけ}とり出し、栗田口なる小家をかり入て、名残おしみのなさけをくみ、又いつかへりあはん事のみ涙_{なみだ}のひま_{ひま}／＼いひかはす。さすがみやこの人なれば、おもひつづけてかくなん詠_なめけり。

とどむべきたづきなれば旅人の帰りみやこの音づれをまつ

とうちすさみける。夢かと斗りうち聞て、これはうたとやらんいふ事かや、われいにしへわかく盛_{さか}んなる時、みやこに久しく住なれ、其上二条は関白前大政大臣_{註4}明実公の御所に立入し時、折節は詩歌のあそび、或時は管絃、又或る時は御酒宴の遊舞様々なりしを見もし聞きもしつるが、世におとろへのかなしさに鄙_びの住_{すま}ゐに年を経て、はたとせあまり越前といふ国へくだり、いやしの賤_{しやう}に交り、みやこの事をばわすれはてて老くぐまれるよはひの程に、耳_{みみ}さへ順_{したが}はねば、詩歌管絃の遊舞、暁の夢にだも見聞かず。それ歌とやらんは神代よりもはじまり、人情のみにかぎらず、花に啼_な鶯、水にすむ蛙_{かはづ}までもうたをよまぬはなきといふなる。

人の心を種として詞の花色香にそみ、まさきのかづらながくつたはり、鳥の跡たへず、長歌、短歌、施_せ頭、元本歌をりくはいのしな_な、浜の真砂のかず／＼にひくは落葉をたねとし、言をよそへる_{註5}々々々いにしへ今の歌人の心々をしらしめおもひ入、さの山ふかく雲の上より、かしん_{註5}まですける道とて、もしほ草かきあつむる事をこそ生れ出たる本意ならめ。われあさましき生をうけ、うきことわざに身をくるしめ、春秋の行かふ空をも世_よの常_{つね}様_{やう}におもひ、九夏三伏の夏の日も、嚴冬_{げんとう}素雪_{そせつ}の冬の夜もあつやさむやと斗りにて明し暮すのみなりしを、今更みやこ人にもよほされて夢斗りおもひ出ぬ。幸老のこしおれなりともかへさではないかがあるべき、余人の聞かん事ならばこそはちらひもせめ、御身とわれより外他にもる事にはあらざれば、心の底の色をあらはすのみなりとて、

_{註6}別行名残おしさの年月をまてよ帰りて又みやこ人

とうち詠_なめて、さらばよと斗りいひ捨、たがひに別れ遠ざかる。かの松浦さよ姫が唐船をまねきし心のうちもかくやと思はれ、とどまる人もこ高き所にあがり見送れ

ば、行々われもかへりみて、袖になみだはせきあへず、折しも弥生の空なれば、かへりみやこの山かくす、春のかすみぞうらめしき。しるもしらぬも逢坂の山をこゆればさざ波や、志賀湖程ちかき大津にこそは着にけれ。

以前も爰にとまりつれど、夜に入、旅宿をかりし程に、あたりの景気をも見ざりし。けふはいまだ暮残る夕日まねき返す斗りにながめわたさんとて、湖の汀まで立出て、浦山の上そひを見るに、まん／＼たる湖水に夕陽影をひたし、峨々たる比叡山も絵にかけるやうに移れり。真砂の上にめぐまりて、海山よとながめをるおもしろさ興に乗じて、

都よりまだ程ちかくうち出の浜はここぞと夕なみの声

とうち吟^{註7}じて、帰る釣舟のちいさき魚などかひ取り、旅宿にかへらんとすれば入相のこゑ聞こへ、そのかたを見れば、あれなん三井の古寺なりと人のいふにつけて、いにし秀郷が龍宮よりとりて来りし鐘のこゑかとなん休らひは／＼けの月は出ね。そこに一夜のかり寝して、明れば浦づたひして、程なく松本の宿につく。遠かりし瀬田の橋もはや程ちかくなりて、

是ヨリ関迄ノ記行ハ無^レ之

御母御息所もおなじく付そひ奉りくだらせ給ふ事なれば、伊勢まで誰かおもはんの言の葉ながらあんじつつ、独も常にこぢたまふ清鹿八十瀬をうち渡り関の地蔵に付にけり。ふりたる堂の其うちに、大の地蔵のおはします。参りて拝み奉るに、相像尊く見えけれども、ふるき地蔵の御事なれば、紫磨黄金の肌もよごれ、御衣の袖の色わかず、忍辱慈悲の御袈裟もそれと斗りのよそひにて、錫杖旧りて輪はぬけたり。如意珠もみがかざれば、五いろの光もなかりけり。されども玉顔ばかりをば、白きものにて度々塗りぬれども、ところ斑なり。聞ならく六道の能化にてましませば、爰とても道のはた導き給へ御地蔵、この堂の軒ならびに数多家ども作りつづけ、旅人のためにとおゝくの飯をもりならべ、これかや物のたとへにも地蔵かしらの飯なるべし。爰にも又おんなの白きものにて顔をぬり、くちびる紅くそめたれども、丹花似ざる事なれば、なよびかならぬけはひなり。袖の焼物たかざれば、芝蘭のこらす匂もなし。ただ端ちかく立出て、軒の柱によりそひて、空歌うたひ、うそぶひて、われこそ旧りたる有様を見るも中々かたはらいたくて、

おもてしろきおんなの人をとむるはさながら関の地蔵なりけり
しろき物かほにぬりつつ人とむる女や関の地蔵なるらん ^{註8}

馬にまかせて行程に、亀山にこそ着にけれ。名どころおゝしといひながら、亀山は猶めでたしや、亀は万年のよはひを保つ。今日の御主古今無双の名大将にて御座す、かたじけなしや代々を重ね、四海安全に治り、吹風枝をならさねば、雨つちくれをうごかさず、慈悲万行にましますば、万民御影を仰ぎつつ、鬼界、高麗、百済国、天竺、震旦こと／＼御供を備へ奉り、君万歳とあふぐなり。武蔵国にきこへたる江戸の広太平安の地に御座城郭をしめ給へば、日本の地は申におよばず、高麗唐土の人までも江戸往來の事なれば、此道中に満々て往還すること信なれ。折々上洛まし／＼て、皇居を守護したまふにより、此街道の広き事、はば拾五間に道作り、双には千世ふる松をうへ、白き砂をまきぬれば、玉をのべたる玉盤に一むら雨のふり通り、露を残すにことならず。江戸と都の其あいだ百三十里余の道なれども、山は高低引ならし、川には舟橋うちわたれば、道も障のなきままに、駒のひづめのこともなく、うしの車のわれらまで心涼しき旅路かな。此亀山は蓬萊の不死の薬も有やらん、目出かりける名どころなれば、

万歳の君をいわへば蓬萊のかめ山ときく名さへめでたき

唐堯舜の御代にも越へ、和朝に延喜の聖代にも増れり。実有難き折からなり。そこを過れば里ありけり。其里人があつまりて遊ぶにあそびて居たりしに、爰はいづくと問ひければ、庄野といふ所なりといふに付て、

春なかの隙ありげなる里の長何をせうのといふ斗りにて
^{ゆたかなる世にありがほの}

《以下つづく》